

## 瀬戸内晴美と直木賞

川口 則弘

瀬戸内晴美は芥川賞候補になつたことがない。昭和三十一年代、『Z』や『文学者』などの同人雑誌に書いていた頃、共に創作に励んだ小田仁二郎や吉村昭たちは、何度か芥川賞の候補にもなつた。なぜ瀬戸内にはその機会がなかつたのか。主催の日本文学振興会は、予選の経過を公開しないため、正直、真実のところはわからない。

いまでは賞の性格も随分変わったが、当時の芥川賞は「新人賞」であることを強く意識していた。他の賞を受けた人や、すでに世に出たと見られる作家は、重ねて授賞する意味が薄いので対象から外す、という考え方である。瀬戸内は昭和三十一年『新潮』の同人雑誌賞を受けて文壇に登場し、昭和三十二年に書かれた「花芯」で毀誉褒貶の話題を

振りまきながら、婦人雑誌や読み物雑誌の原稿依頼に懸命に対応した。もはや世に出たと言つてもおかしくはない。芥川賞の対象から外された理由の一つはそれだろう。

しかし、ここに芥川賞と並び称される賞がもう一つあつた。直木賞である。

二つの賞は同じ組織が同時につくつて、いつも一緒に発表される。そのため二つで一つ、十ある世界を五と五で二分して対象にしている……と思われがちだが現実はずう。小説界すべてを十とすれば、両賞が見据える範囲は一にも満たないし、そもそも両賞が標榜する「純文学」と「大衆文学」にしても、対立する概念でもなければ補完する関係にもない。直木賞の場合、芥川賞が相手にする文芸雑誌や

同人雑誌に載った短篇を含め、読み物誌、新聞、単行本などから、長篇、短篇、作品集を対象にする。ルールがあるようでないような曖昧な賞。それが直木賞だった。

候補に挙げられる作家の顔ぶれも、履歴や活躍フィールドに統一性はない。とくに昔はその気配が濃厚で、昭和三十年代の直木賞をたどると、職業作家から同人誌作家、初めて小説を書いた人からすでに活躍中の人まで、多種多彩だ。第四十九回（昭和三十八年上半年期）では六人が候補になったが、やはりまとまりのなさは明らかだった。

来水明子は三十一歳、売り出し中の歴史小説家で、長篇『短夜物語』で四度目の候補に挙げられた。もとは「佐藤明子」の名で第十回オール新人杯を受賞した人で、その受賞作「寵臣」が直木賞の候補になったのを皮切りに、女流文学賞や小説新潮賞でも幾たびか候補になった。ただ、本人は狷介孤高の性格だったらしく、文壇付き合いを避け、いまではその名もばつさり忘れ去られている。

佐藤得二は、当時の候補者としては高齢に属する六十四歳の無名作家だった。候補になった『女のいくさ』は初めて書いた書下ろしの長篇で、実在の美容師をモデルに一人の女性を造型して、徒弟制度の時代から美容の世界を艱難

辛苦で生き抜いてきた女の姿を描いている。小説では無名でも若い頃から佐藤の履歴は立派なもので、学者として哲学研究の道歩んだのち、戦後は社会教育局長に就任、官僚の立場で采配をふるう。同局で芸術課長をしていた今日出海とは相知る間柄だったが、第四十九回直木賞では今が選考委員、佐藤が候補者という関係になった。

福井馨は、共同通信社に勤める文芸記者だった。仕事のかたわら丹羽文雄門下の『文学者』に加わって創作を志す。眼疾で目が見えないという境遇にもめげず、妻の協力を得ながら口述筆記で売れない小説をこつこつと書き続け、のちに昭和五十九年自費出版で出した『風樹』で、第十三回平林たい子文学賞を受賞することになる。

残る三人の候補者は、本稿を読んでいる方にもおそらく馴染みがあるだろう。一人は津村節子で、それまでも「鍵」で一度直木賞の候補になっていた。のちに「さい果て」で、同人雑誌賞を、「玩具」で第五十三回芥川賞を受賞するが、文壇に出る前に少女小説で稼いでいたことや、『文学者』グループの一員だったことから瀬戸内晴美とは仲のいい友人だった。

もう一人、梶山季之も、瀬戸内とは何かと縁がある。駆

け出しの頃は小学館とともに売文を請け負った同業者であり、瀬戸内の「夏の終り」が評判になったときには梶山による「不思議な三角関係を解消した 作家瀬戸内晴美の愛の遍歴」という取材記事が『婦人倶楽部』昭和三十八年一月号に載った。『黒の試走車』（昭和三十七年）を発表して

以来、活きのいい読み物作家として注目を浴び、この回候補になった「李朝残影」は、直木賞を運営する文藝春秋新社の『別冊文藝春秋』に掲載されたものだった。多くの人たちの見るところ、受賞に最も近いと思われるのは梶山だろう。本人も内心期待していたに違いない。瀬戸内に「二人とも、有力だそうだよ。貰えるといいね。二作一緒だと一番嬉しいね。」と言葉をかけたと伝わっている（平成二十一年五月・日本経済新聞出版社刊『奇縁まんだら続』）。

さて、この状況のなかで瀬戸内の「あふれるもの」が直木賞の候補に挙げられた。すでに昭和三十六年「田村俊子」で田村俊子賞を受賞、昭和三十八年には「夏の終り」が女流文学賞に選ばれて、『婦人画報』に「かの子撩乱」を、『週刊新潮』に「女徳」を連載中と、もはや新人の枠は超えている。まわりが有力候補として注目したのもよくわかるが、

結果直木賞は、初めて小説を書いた佐藤得二ひとりへの授賞と決定した。

「あふれるもの」に好意的な委員がいなかったわけではない。川口松太郎、海音寺潮五郎は佐藤との二作授賞を提案した。しかし村上元三、木々高太郎、松本清張など反対派も強硬で、瀬戸内に授賞する芽は消滅した。当然どんな小説や作風にも賛否はある。それはそれで仕方ない。

ただ、その中で小島政二郎が書いた選評に、いかにも直木賞のもつ微妙な論理が表われていた。

「一番心を引かれたのは、瀬戸内晴美さんの「あふれるもの」だった。外の人の作品を抜いてうまいし、女でなければ書けない世界を書いている点、新鮮だった。（中略）「夏の終り」も、「雉子」も、私の好きな作品だ。しかし、この作者は直木賞にするには余りに有名すぎる。そう思って、私は点を入れなかった。」（『オール讀物』昭和三十八年十月号、小島政二郎「本当の話の強み」）

作品はいい。だけど有名すぎる。それによって票を入れない委員がいたわけだ。絶対的な作品本位での選考ではない。何とも直木賞の困った性質には違いない。

では、いっぽう瀬戸内は直木賞にどう反応したのだろうか。

候補になったことを喜んでいた形跡は見られない。先に引用した『奇縁まんだら 続』の「武田泰淳」の項によると、嬉しさや期待よりも困惑のほうが強かったらしい。

選考会の前日、講演会のために同行していた武田泰淳に、瀬戸内は自分の心情をこう語った。

「私は思い余って、直木賞の候補に上っていること、わたしは「あふれるもの」は芥川賞にふさわしいと思うので、直木賞ならほしくないことなど自分の心の中のものやもやをつい話してしまっただ。それまでそんな私的な話をしたことにはなかったのに、どうしてそんな気分になったのか思い出せない。自分の文学的資質がどこにあるかもわからないのに、私は、ただただ、純文学に憧れていて、そう呼ばれる作家になりたくてたまらなかったのだ。」(『奇縁まんだら 続』)

これは四十年以上を経ての回想だが、選考会が終わって間もない頃にも、瀬戸内のコメントが残されている。

「私は芥川賞ならほしいと思っていたけれど、直木賞の候補になったとわかったときは、意外に思いました。多勢の人が「瀬戸内さんが本命ですよ」というので、なんとなく、もらわなきゃ悪いという気になりましたよ。それから人間

として「落ちた」という言葉はいやですね。屈辱感がありますよ。」(『週刊読売』昭和三十八年八月十一日号「芥川賞・直木賞残酷物語」)

芥川賞ならいいが直木賞は不服、という感覚は一貫している。よほど直木賞も嫌われたものだと言木賞ファンとしては悲しくなるが、すでに活躍している作家を勝手に候補に選び、フィールドの違う人たちと並べて審査を気取るのだ。直木賞が嫌がられるのも仕方はない。

残念ながら瀬戸内にとつての直木賞は「とくに欲しくはないし、しかも落とされた」痕跡となってしまった。源氏鶏太の選評にこんな文章がある。「あふれるもの」という一短篇ではなく「夏の終り」という単行本が対象になったら、やすやすと通ったのでなからうか(『オール讀物』昭和三十八年十月号)。となると責任は、下読み(予選)をした文春社員たちにあつたのか。

いまさら責任者を探しても何も起こらない。ただ、その後、寂聴として『花に問え』で谷崎潤一郎賞を受賞する平成四年まで約三十年、どの文学賞に選ばれることなく、ただだ生きて書き続けた瀬戸内の姿のほうが、直木賞よりも尊敬に値するのは言うまでもない。